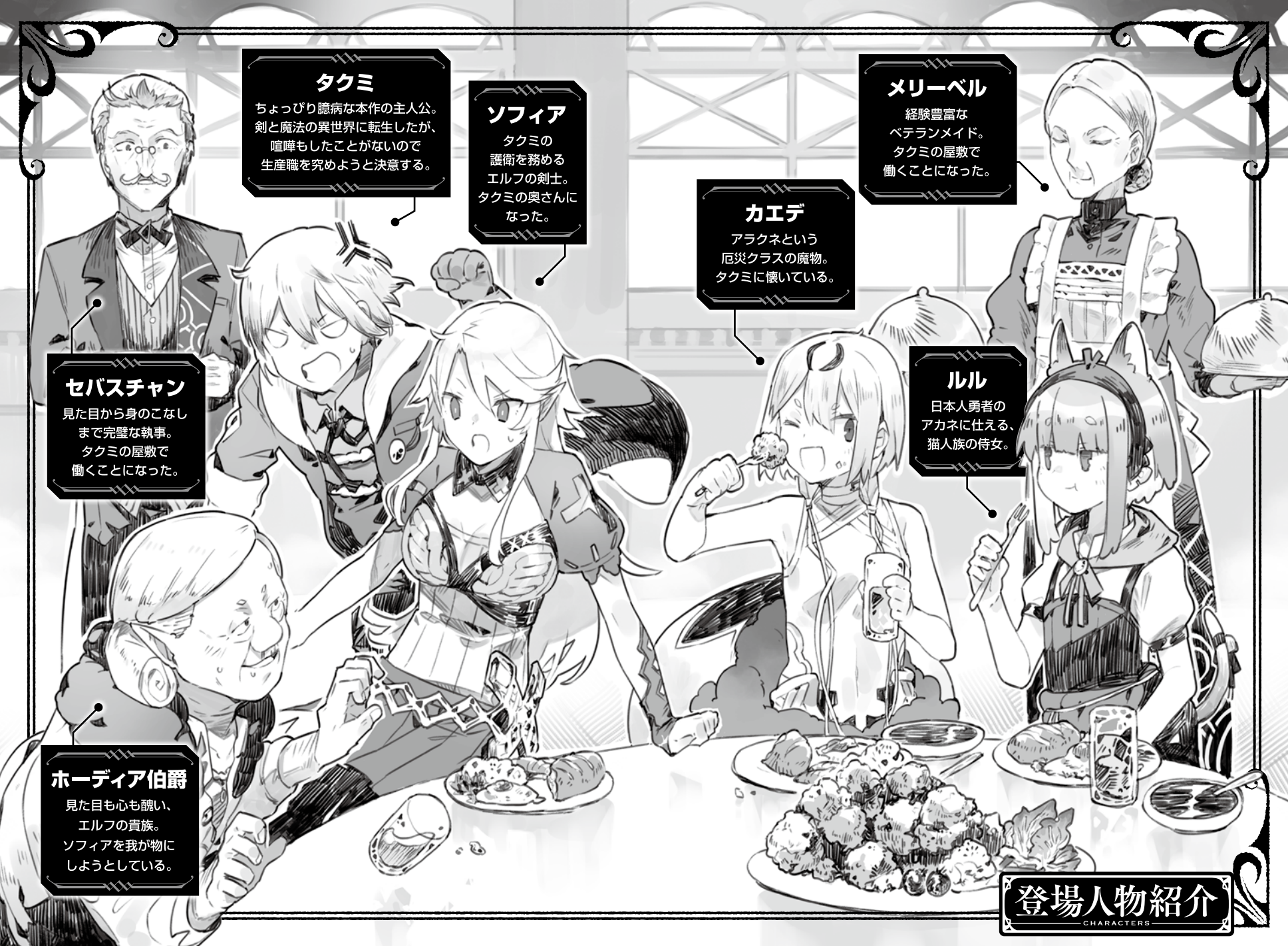
いずれ最強の錬金術師？

SOMEDAY WILL I BE THE GREATEST ALCHEMIST?

9

小狐丸
KOGITSUNEMARU


タクミ
ちょっぴり臆病な本作の主人公。剣と魔法の異世界に転生したが、喧嘩もしたことがないので生産職を究めようと決意する。
ソフィア
タクミの護衛を務めるエルフの剣士。タクミの奥さんになった。
メリーベル
経験豊富なベテランメイド。タクミの屋敷で働くことになった。
カエデ
アラクネという厄災クラスの魔物。タクミに懐いている。
セバスチャン
見た目から身のこなしまで完璧な執事。タクミの屋敷で働くことになった。
ルル
日本人勇者のアカネに仕える、猫人族の侍女。
ホーディア伯爵
見た目も心も醜い、エルフの貴族。ソフィアを我が物にしようとしている。
登場人物紹介
CHARACTERS

1　復興事業を考えてみよう

エルフのソフィアと人族のマリア、そして兎人族のマーニと結婚した僕、タクミ。挙式後間もなく新婚旅行に行ってきたんだが、これがなかなかの大冒険で……

行きの行路は、城塞都市ウェッジフォートを抜け、ロマリア王国を横断、それからドワーフの住むノムストル王国に行くというもの。

初めてのノムストル王国という事でとても楽しみにしていたんだけど、途中でシドニア神皇国の残党騎士団と交戦するはめになるわ、ドワーフ国王の兄弟喧嘩に巻き込まれて刀造りをさせられるわで、慌ただしい展開に。

まあ、そんなトラブルがありつつも、買い物したり鍛冶場を覗かせてもらったり、一応観光も堪能したんだけどね。

帰りくらいはのんびりしたいなと思っていたものの、やっぱりそうはいかず……

復興途中のシドニア神皇国を横切った際に魔物に襲われ、立ち寄ったサマンドール王国では貴族に雇われたという一団に絡まれる事になった。

楽しかったんだけど、最初から最後まで忙しない新婚旅行だったな。

◇

流石に疲れてしまった僕達は、話し合いの結果、しばらくは聖域の屋敷でゆっくりしようという事になった。

それぞれ好きな事をしてリラックスする中、僕は一人思案する。

今回の旅行で色々考える事があったのだ。

まずシドニア神皇国。現在、バーキラ王国とロマリア王国による暫定統治下にあるんだが、復興が遅れ、依然荒廃したままだった。シドニア神皇国の国民が苦労しなきゃいけないのはある程度仕方ないと思う。神光教の罪もあるし、皇王の治世の下で利益を享受していたわけだしね。

ただ、人は生まれる場所を選べないから、その国の民だというだけで責任を取らされるのはちょっと。特に子供達には罪なんてないし、僕が手を差し伸べてあげても良いと思う。

続いてノムストル王国は……やっておくべき事はないかな。友好的なドワーフも多いし、あの人達は逞しいから。

最後に、寄り道したサマンドール王国。ここは色々と問題ありだ。馬鹿な貴族に絡まれたし、ソフィア達を狙った襲撃に加えて、僕にまで刺客を送ってきて……うん、今度何かしてきたら叩き潰そう。

とりあえずこの中で一番何とかしないといけないのは、シドニア神皇国だろうな。

良くない教えだったとはいえ、国民の心の拠りどころだった神光教が崩壊し、国としてまとまりがなくなりつつある。

なお、今のシドニア神皇国では、信仰の自由が保障されている。なので、これまでのように堕ちた精霊を信仰し続けるのも自由なんだけど、バーキラ王国とロマリア王国は創世教への改宗を推奨している。

この際、僕がシドニア神皇国に創世教の教会を建てて回るのはどうだろう。復興にも国民の精神的にも良いと思う。

……いや、僕が勝手に先走るのはまずいか。まずは、バーキラ王国やロマリア王国にお伺いを立てないと。

そうと決まれば、両方の王に手紙を書こう。

そう考えた僕は、マーニにお茶を淹れて部屋に持ってきてもらうように頼むと、そのまま部屋に戻るのだった。

旅の途中で目にしたシドニア神皇国の惨状、そして僕がやろうとしている復興のアイデアを書き連ねていく。

そうしてふと気づく。
「……そういえば、農地は勝手に開墾したらまずいんだよな」
畑の開墾をするのや水路を引くのは、土属性魔法を使えば簡単に出来る。だけど、世間の土属性魔法師は、戦闘以外に魔法を使おうとしない。最近になってやっと、家屋の建設に使い始めたくらいだ。
農地となると偏見が根強く、魔法使いの仕事じゃないと嫌がる人が多い。なお、建設に土属性魔法を積極的に使いだしたのは、僕がウェッジフォートで強固な砦を造って見せたからしい。
せっかくなので教会を建てたり農地を整えたり、シドニア神皇国に色々してあげたいと思うんだが、一方的な施しは良くないよな。復興を手伝うにも国と国が絡む以上、大義名分が必要らしいし。こういう政治事がからっきしだめな僕の代わりに、誰かやってくれると良いんだけど……
ソフィアは意外と人見知りなので、その役割を任せるのは難しい。何より彼女は僕の護衛だと言っているし、それに誇りを持っている。ソフィアと出会った当時に比べ、僕も強くなってるんだけど、ソフィアに言わせると護衛は必要らしい。
マリアは、メイドの仕事や家事全般は完璧だけど、政治は完全に守備範囲外だ。
マーニも無理だな。何より彼女は僕達パーティ以外にあまり心を許していない。
当然、狐人族のレーヴァも無理だ。暇があれば工房に籠もっている物作りオタクだからね。
猫人族のルルちゃんは年齢的にNGなので対象にならない。

となると、消去法でアカネになるんだけど……アカネは日本で生徒会長を務めていたくらいに優秀だ。とはいえ、就職経験がなくアルバイトの経験もない元女子高生に、王や貴族、国の官僚との交渉を任せるのは忍びないか。
その前に、アカネに頼もうと話したら殴られそうだけどね。

◇

そんなふうに色々と考えつつ数日経ったある日、僕はみんなをリビングに集めて相談する事にした。
シドニア神皇国の復興を手伝いたい。けれど、暫定統治しているバーキラ王国とロマリア王国の顔を潰してはいけない。それらを解決するアイデアはないか、そして上手に交渉出来る人はいないかと尋ねる。
早速アカネが否定から入る。
「私にお偉いさんとの交渉なんて無理よ。そんなのタクミがすればいいって言いたいけど……アンタは無理そうね。タクミは元々アラフォーのサラリーマンだったんでしょう？　少しくらい似たような経験はないの？」
「僕は技術職で、しかもほとんど外との交渉や打ち合わせもない仕事だったからね」

僕が申し訳なさそうに答えると、ソフィアが提案してくる。
「この際、誰か雇用するのはどうでしょう？　そもそも今も人手が足りていません。農産物や薬草類、魔導具やポーション類、塩や海産物、魔大陸との交易と、聖域の経済活動は拡大しています。そろそろ何人か人を雇ってもいいと思うのですが……」
「考えてもなかった。普通そうだよね。自分達で何でもするのが当たり前になってたけど、人は必要か」
聖域という都合上、適当な人は雇えないという縛りはあるが、探せば何とかなると思う。
ちなみに今も農産物、海産物、塩、薬草類、お酒関係の交易担当者はいる。だけど、経理の人員くらいは新たに入れた方がいいだろう。それにプラスして、バーキラ王国、ロマリア王国、ユグル王国とのやり取りをする人を雇いたい。
ソフィアのアイデアには全員賛成で、何人か雇用する事に決まった。
経理には奴隷商会でもいい人材がいる可能性はあるけど、国との折衝を任せられる人はそうはいかないよな。これは、ボルトン辺境伯やいつもお世話になっているパペック商会のパペックさんにも相談しないと。
うーん、でも何だろう。
シドニア神皇国の人達に少しでも援助したいだけなのに、何となく遠回りしている気がするのは、僕だけだろうか？

まず、ボルトン辺境伯家の家宰セルヴスさんにアポイントメントを取った。
ボルトン辺境伯も今は、未開地や聖域の事があって忙しくしていて、流石にその日にポッと行っては会えなくなっている。
ちなみに、未開地はどこの国にも属さない中立地帯とされているんだけど、国の飛び地となっている場所もある。
その一つがウェッジフォート。ここはバーキラ王国領だ。ロマリア王国にも飛び地はあって、ウェッジフォートとロマリア王国間に建設された街がそれに当たる。なお、聖域の近くに建設されたバロルは、バーキラ王国、ロマリア王国、ユグル王国の三ヶ国が合同で運営している。
セルヴスさんに手紙を届けたあと、ボルトンの屋敷で雑用を片付けていると、ふいにアカネが尋ねてくる。
「この際、ボルトンの屋敷を管理する人も雇わない？」
「なるほど。レーヴァが頻繁に聖域とボルトンを行き来するから、レーヴァに屋敷の掃除なんかも任せっきりだったけど、確かにいいかもね」
今でもパペックさんへのポーションなんかの納品は、レーヴァが直接持って行っている。たまには僕も行ってるけどね。
そもそも僕らには聖域に立派な屋敷があるので、ボルトンの方はいらないんじゃないかって話も

あるんだけど、思い入れもあるし売却するつもりはない。日本とこの世界を通じて初めて持った家だし、カエデとの二人きりの生活から始まり、ソフィアとマリアが増えていって……と思い返せば楽しい思い出がいっぱいだ。これからもここが僕にとって重要な場所の一つなのは変わらない。

アカネが言うように、ボルトンの屋敷を管理する人を雇った方がいいだろうな。もの凄く今更な気もするけど。

更にアカネが提案してくる。

「聖域の屋敷にも、人が欲しいわね」

「え、聖域の屋敷にはマリアやマーニがいるじゃないか」

僕がそう言うと、アカネは首を横に振って、「やれやれ、わかってないわね」と口にする。

「いい？　マリアやマーニはタクミの奥さんでしょう。あれだけ大きな屋敷にメイドや小者もいないなんておかしいのよ。聖域なら仕事が欲しい子供達を小者として雇うのもいいわね。うちで働きたい子はいっぱいいると思うわ」

アカネの説明に、ソフィアも頷いている。

なるほど、子供が働ける環境か。

最近では聖域にもお店が出来、徐々にお金を使える環境になってきている。聖域では仕事をしている人達にはそれに応じた賃金を支払っているが、子供達の多くは畑のお手伝いくらいしかしていない。

そんな子供達が自分でお金を稼げる環境が整うのは、確かに良い事かもしれないね。

◇

数日後、セルヴスさんから連絡が来て、ボルトン辺境伯と会える事になった。

「久しぶりだな、イルマ殿」

「ご無沙汰してます。ボルトン辺境伯閣下」

「堅苦しいな。公式の場では困るが、ここではゴドウィンで構わん」

「それではゴドウィン様と」

今日は、僕、ソフィア、アカネの三人で、ボルトン辺境伯の城のような領主館に来ていた。簡単な挨拶のあと、僕から用件を切りだす。

「……うーむ、シドニアの復興の手伝いがしたいと？」

「はい。まあどちらかというと、僕もシドニアと無関係じゃないどころか、崩壊のトドメを刺していますし。罪滅ぼしというわけではありませんが、シドニア国民の困窮をこの目で見てしまうと、何かしら出来ないかと思いまして……」

「……食料を施すのは問題ないと思う。創世教も復興支援として物資を配っているしな。だが、建物を建てるのや農地の開墾をするのは問題になりかねん」

三ヶ国の間でもシドニアの復興支援はデリケートな問題らしい。分割統治するのか、新しい国を建国させるのか、そういった話し合いは依然としてまとまっていないのだとか。仮に分割統治するにしても、三ヶ国での領地の配分で揉めるのは目に見えているそうで、シドニア崩壊後それなりに時間が経つのに、未だ明確な指針も立てられないとの事。

ボルトン辺境伯はそういった事を説明したあと、嘆くように口にする。

「そんな状況であるため、大変申し訳ないのだが、バーキラ王国に所属するイルマ殿が大々的にシドニアを開発するというのはまずいのだ」

「僕は、みんなが飢えずに暮らせて、最低限、身の安全が保障された生活をしてほしいだけなんですけどね……」

「それがなかなか難しいだろうがな」

三ヶ国でも治安の維持が最優先なのはわかっているが、どこの地域をどこの国が担当するのかで揉めているらしい。

やはり政治の問題は一筋縄ではいかない。

「それで、僕、考えたんですが、シドニアには創世教の教会はありませんよね」

「ああ、訳のわからん宗教国家だったからな」

「それなら創世教の教会を僕がいくつか建てて、そこを拠点に創世教の人達に、支援活動してもらうのはどうでしょう。創世教の教会になら、僕が寄付しても問題ないでしょうし」

女神ノルン様を信仰する創世教は、バーキラ王国、ロマリア王国、ユグル王国の三ヶ国でも最大の宗教勢力となっている。

国が関わると政治的な問題が発生するけど、創世教が宗教活動の一環として、シドニアの困窮する人達に手を差し伸べるのはセーフなんじゃないかな。

「……ふむ、確かにイルマ殿なら教会の建設は容易いか。創世教としても新しいポストに人員を送れるのだから、喜んで受け入れるだろう。何より、聖域の管理者であるイルマ殿が教会を建設すると知ったら、大喜びで大司教が礼を言うかもしれんな」

ボルトン辺境伯の反応は悪くない。教会なら国を越えての活動に問題はないだろうと言ってくれた。大司教のお礼はいらないけど。

「いけそうですかね」

「うむ、その線で各国に根回しする方向で、王と計ってみる」

一応これで、シドニアの復興支援の話は落ち着いたかな。

2　人を紹介してもらおう

シドニア神皇国の復興支援で何が出来るかの相談をしたあとは、今後三ヶ国との折衝を任せられ

る人材についてだ。
「それはありがたいお話でございます」
僕がその話を切りだすと、セルヴスさんは大袈裟に喜んだ。
うちの人材雇用が「ありがたい」とはどういう事だろう。首を傾げて不思議に思っていると、セルヴスさんはその理由を教えてくれた。
「イルマ殿が、大精霊様達が認めた精霊樹の守護者であり、なおかつ聖域の管理者である事は、国内のみならず他国でも耳のいい方達には知られています。ですが、いざコンタクトを取ろうと思いましても、イルマ殿は普段は聖域で過ごされており、こちらにはなかなかいらっしゃいません。イルマ殿が留守にしている間は、屈強なゴーレムが屋敷を守っており、手紙をお渡ししようにも近づけず……といった状況でした」
「……申し訳ないです」
ボルトンの屋敷には、以前襲撃された経験から、結界と半自律思考型ゴーレムを設置している。僕が留守の間、屋敷への侵入者は全て捕縛されていた。
セルヴスさんの話では、国内の商人や貴族、それに王家、あとは同盟国の貴族や商人から、聖域で造られたお酒を売ってほしいとの要望が殺到しているらしい。それはパペックさんからも聞いていたので、僕も知っていた。
だけど、聖域のお酒は売るために造っているんじゃないんだよな。ドワーフ達が中心になって、

聖域内用と自分達が飲む用に造っているだけなのだ。そんなわけで、聖域外に流している量は極少量に過ぎない。
僕は要望への対応をやんわりと断る。
「お酒類をすぐに増産するのは難しいですね。ブドウ畑や大麦畑もそうですが、すぐに増やせる類のものではありませんから。土地の問題もありますし」
「それはそうでございますね。よその土地で収穫された作物を買い入れてお酒を造ったのでは、他のお酒と変わらない味にしかならないでしょうし」
ゴランさんやドガンボさん達ドワーフが、わざわざ聖域に移り住んでまでお酒を造っているのは、聖域で出来る作物の品質にあるのだから、外から原料を購入しての酒造は意味がない。ドリュアスをはじめとする大精霊のせいなのか、精霊樹の影響なのかわからないけど、とにかくブドウにしろ麦にしろ、聖域の作物は極上のお酒の原料になるのだ。
今では、普通の街に比べれば少ないとはいえ、聖域も人口が増えたので、お酒は聖域の住民でほぼ消費されてしまう。ドワーフ達が頑張って増産してはいるが、余裕を持って外に販売出来る量はないのが現状だ。
セルヴスさんが更なる要望を伝えてくる。
「精霊樹関連の素材は、どこの国も喉から手が出るほど欲しています。現在は、ボルトンの冒険者ギルドとパペック商会を通して、僅かな量が出回るだけですから」

「精霊樹の素材については、今後もそんなに増やせませんよ」
「いえいえ、窓口が出来る事が大切なのですよ」
そう言ったあと、セルヴスさんは話を戻す。
「それはさておき、お屋敷で身の回りのお世話をする者をお求めでしたね。最低でも、ボルトンの屋敷を管理するメイドが一人、家宰の役目を果たす者が一人、聖域のお屋敷のメイドが一人、料理担当する者が一人の四人、といった感じでしょうか。欲を言えばメイドは二人ずつ欲しいので、合計は六人ですかね」
思っていた以上の人数に、僕はびっくりしてしまう。
「そ、そんなに必要ですか」
「はい。マリア様やマーニ様がイルマ殿の身の回りのお世話をする事もあるでしょうが、本来であればよろしくありませんから」
セルヴスさんは、聖域の屋敷に来客はないとしてもボルトンの屋敷は多くなるはずだと言い、アカネと同じように、僕の奥さんが働いているのは良くないとアドバイスした。ボルトンにしても聖域にしても、僕の住んでいるレベルの屋敷なら、使用人の数もそれなりにいるのが普通らしい。
セルヴスさんは更に続ける。
「人が必要なのは確かですが、イルマ殿の今のお立場を考えれば、人選は慎重にしなければなりませんね。実際、イルマ殿の側に人を送り込みたい者は大勢いるのですから」

「何か思惑があるって事ですよね……」
「その認識で正しいと思われます。どうにかして甘い蜜を吸おうと聖域に食い込みたい者達ですからね」
それからセルヴスさんは、パペックさんと相談して雇用する人員の選別をすると言ってくれた。国内外広く最高の者を探したいので、人選にはそれなりに時間が欲しいとの事。
「シドニアの件とあわせまして、お任せください」
「僕なんかのためにご迷惑かけてすみません」
バーキラ王国の辺境伯家を取り仕切る、セルヴスさん。そんな多忙な彼の手を、僕達の事で煩わせるのは申し訳ない気持ちになるな。
「いえいえ。イルマ殿のおかげで、ボルトン辺境伯領はかつてないほど繁栄しています。このくらいの事、お返しの一部にもなりません」
恐縮していたら、逆にお礼を言われてしまった。
ともかくこれで、時間はかかりそうだけど、人材の問題は何とかなりそうかな。
ちなみにシドニアでの教会建設の方は、ボルトン辺境伯がバーキラ王に報告を上げ、その後同盟国と創世教と話し合い、規模や建設場所の選定、資材の調達などクリアすべき問題があるので、こっちもすぐにとはいかないらしい。
僕はセルヴスさんにお礼を言って、その日は聖域へ帰った。

◇

数日後、セルヴスさんから人選が難航しているとの連絡が届いた。
その話を、聖域の屋敷のリビングでみんなにする。
「なかなか集まらないの？　メイドは奴隷商会で探した方がいいんじゃない？」
「アカネさん、普通の奴隷商会だと最低限の教育しかしていないんですよ。でもムーラン奴隷商会なら教育が行き届いているので、すぐにメイドとして働けます」
「なら、それでいいんじゃない？」
アカネとマリアが、メイドは奴隷から探そうと言っている。
僕達には転移ゲートや天空島など秘密にしている事があるので、機密保持を考えたら契約で縛れる奴隷もありかなと思うんだけど……そもそもセルヴスさんの言う「難航」の意味はちょっと違うんだよね。
「アカネ、マリア、人が集まらないんじゃなくて、応募が殺到していて困っているみたいなんだよ」
セルヴスさんは、ボルトン辺境伯家の人脈だけでなく、様々な伝手を使って秘密裏に募集をかけたらしい。

僕達に雇われるという事は、聖域に入る事を意味する。つまり、大精霊達の厳しい目をくぐり抜けなければならない。腹に一物持っているような人や、誰かの紐付きの者は大精霊達に認められないのだ。
しかし、そんな慎重さをもってしても予想以上の応募が来てしまったようだ。
「聖域産のお酒を欲しがる商人や貴族は多いですから」
「レーヴァのポーションも人気であります」
ソフィアは聖域産のワインのファンだから、気になるのはお酒の事みたいだね。レーヴァも負けじと自分の作ったポーションが人気だと胸を張っている。
実際、レーヴァの作るポーションは、普通のポーションより明らかに効果がある。それに、精霊樹の素材から作られるポーションは少量しか出回ってないから、かなり貴重なのだ。
元より注目されていた聖域、その管理者である僕が人を求めているという情報が流れたわけだから、それはもう収集がつかない状態になってしまった、という事らしい。
アカネがちょっと面倒くさそうに言う。
「それでどうするの？　家宰なんてよっぽどちゃんとした人じゃないと、うちじゃ無理よね」
「そうなんだよな。もういっその事、ウィンディーネやシルフに面接官でもしてもらうか」
僕が冗談のつもりで言った瞬間――
その場に、水を司る大精霊ウィンディーネ、風を司る大精霊シルフ、そして二人に加えて、植

物の大精霊ドリュアス、光の大精霊セレネーや闇の大精霊ニュクスまで現れた。
「タクミちゃ～ん、面接官ならお姉ちゃん達に任せなさ～い」
「そうよ。家宰を雇ったら、その子は聖域とボルトンや天空島、魔大陸の拠点を行き来するんでしょう？　なら、私達がちゃんとした人の子を選んであげるわ」
「そんな面白そうな事……っううん、大切な事を、私達抜きにはありえないでしょ」
「そうそう、私とニュクスなら人の子の悪意を見破れるわよ」
「……うん、見破る」
ドリュアス、ウィンディーネ、シルフ、セレネー、ニュクスが次々に自分達をおいて他に面接官に相応(ふさわ)しい者はいないと言ってきた。
うん。色々主張してるけど、大精霊達の本音は「面白そうだから」だね。
とはいえ、渡りに船とも言えるな。
「わかったよ。でも、面接は聖域で出来ないよ」
「大丈夫よ、タクミちゃん。お姉ちゃん達がボルトンに顕現(げんげん)するから」
「私達のチェックをクリアするのは少数だから、すぐに選別は終わるわよ」
「タクミはその中から好きに選んだらいいのよ」
ドリュアス、シルフ、ウィンディーネが次々と口にした。
楽しそうな大精霊に呆(あき)れつつ僕は言う。

「はぁ、どちらにしても、少し時間が欲しいってセルヴスさんから連絡があったみたい」
すると、アカネとソフィアが告げる。
「たぶん、その時間で他の貴族や商人は、更に人を送り込む準備をするのね」
「ボルトン辺境伯だけが私達と縁を深めている今の状況は、周りからすれば妬(ねた)ましいですからね……」
きっと、そういう事になるだろう。
いずれにしても大変なのはセルヴスさんだよな。
「貴族や商人がどう思おうと、私達は関係ないわ」
「そうね。日にちが決まったら、お姉ちゃんに教えてね」
「まあ、タクミに教えてもらわなくてもわかるけどね」
ウィンディーネ、ドリュアス、シルフが言いたい事だけ言うと、「じゃあ、そういう事で」と大精霊達は揃って消えてしまった。
僕は溜息交(ためいきま)じりに呟(つぶや)く。
「セルヴスさん、驚くかな」
「大精霊様達が揃って面接官をするんですから、それは驚くと思いますよ」
「……驚く程度で済めばいいですね」
ソフィアとマリアは心配そうにしている。

いや、面倒くさがりのサラマンダーと、お酒造りに忙しいノームがいないだけマシだと思おう。
それでもボルトンに大精霊が何人も顕現なんてしたら、パニックにならないわけがないよね。本当に頭が痛くなる。
「はあ、僕は面接場所を警備するゴーレムを何体か造っておくよ」
「それならレーヴァもお手伝いするであります」
「うん、お願い」
こうして僕とレーヴァは、想像以上に大事になりそうな面接のため、警備用のゴーレムを造るべく工房へ移動した。

僕はレーヴァと数体の警備用ゴーレムを造り上げた。
鋼鉄製のアイアンゴーレムだ。
一応、魔法攻撃を受けた場合を考えて、ミスリルでメッキを施したので、すぐに壊れる事はないだろう。
武装は二種類で、大盾と2メートルほどの六角棒を装備したゴーレムと、刺股を装備したゴーレム。
あくまで警備用ゴーレムなので、殺傷力の低い装備で、取り押さえる事を目的としている。
まあ、2メートルを超える鋼鉄製のゴーレムが振るえば、六角棒や刺股といえど十分破壊力があるけどね。
久しぶりにゴーレムを造って楽しくなった僕は、ついつい夢中になってしまう。
同類のレーヴァはブレーキ役にはならず、更にアクセルを踏み、二人でゴーレムを造っていく。
その後、警備用ゴーレム数体を指揮する、指揮官ゴーレムを造った。
大盾に六角棒装備のゴーレム五体と、刺股を装備したゴーレムを二体、それを指揮するゴーレム一体の八体で、一小隊としようかな。
なお、指揮ゴーレムの武装は、非殺傷武器の十手を二本装備させた。
十手は完全に僕の悪ノリだ。時代劇で見た火付盗賊改方をイメージしたんだよね。この辺は元がアラフォーのオッサンだった名残なんだけど、アカネは全然共感してくれなかったな。
ただ、レーヴァやソフィアには面白がられた。十手は非殺傷の武器で、相手を取り押さえる事を目的とした物だと説明すると、十手の長さや鉤の形状のアイデアを出してくれて盛り上がったよ。
まあ、こうした一連のゴーレム造りは現実逃避とも言うんだけど。

「やっぱりメイドだけでも奴隷を買えば良かったかな……」
「ちょうど良い人を探すのが難しいのは一緒だったと思いますよ」
セルヴスさんから伝えられた状況を思い出して愚痴をこぼす僕を、ソフィアが優しく慰めてくれる。

「私はともかく、タクミ様が購入した奴隷全員が最高の人達なのは幸運だったと思います」
「確かに……」
元は奴隷だったソフィア、マリア、レーヴァ、三人とも才能豊かで性格も申し分ない。僕がいかに豪運だったのかがわかる。
奴隷は理不尽な命令じゃなければ、主人に逆らえないけど、だからといってその奴隷が納得しているかはわからない。ソフィアやマリアのように、奴隷契約なしに、僕に尽くしてくれるケースはレアだと思った方がいいだろう。
ソフィアが僕に笑いかける。
「大精霊様達が、貴族達や商人達が潜り込ませようとするあからさまな間諜を簡単に選別なさいますよ」
「そうだね、ウィンディーネ達には感謝だね」

◇

その三日後、セルヴスさんから日程が決まったと連絡があった。
面接の日程は、遠方からの参加者のために一月後になったらしい。それを聞いて、そんな遠くからも来るのかと、げんなりする僕は悪くないと思う。

僕は、セルヴスさんの手紙を読むソフィアに尋ねる。
「シドニアに教会を建設する話はどうなったんだろう」
「そちらも書かれていますね。現在、創世教の関係者と、どこの街に建設するのか話し合い中らしいです」
うんざりするのを止められない。
教会を建設するだけなのに、それが進まないのだ。
宗教に絡む問題がややこしいのはわかる。だけど話がなかなか進まないのは、きっと別の理由だろうな。
「建材をどこの国がどのくらい調達するのか、どこの街に建設すれば布教に役立つのかなど、三ヶ国と創世教、そしてシドニアの住民達の思惑が絡んで、話が進まないのでしょう」
「教会が早く建てば、孤児院の設置や炊きだしなんかの施しも始められるのに……」
シドニア神皇国の復興援助と聖域の人材不足の解消、その二つの問題は、僕の狙いから大きく外れて色々な人の思惑が絡み、ちょっと面倒くさい騒動になってしまった。
そんなわけで僕は、現実逃避気味に警備ゴーレムの製作に夢中になる。そしてその合間に、ポーション類作り、聖域や天空島、魔大陸の拠点の整備などをして日々を過ごすのだった。

◇

そして、ボルトンでの面接会の日が訪れた。
朝早くボルトンの屋敷へ転移した僕達は、そこで朝食を食べ、セルヴスさんから指定された、ボルトン辺境伯家の騎士団訓練所に向かっていた。
「……嘘だろ」
「「……」」
「……種族も様々です」
「これは私の予想を超えているわね」
「凄い人だニャ」
「この中から選ぶのでありますか……」
広い訓練所の敷地には、僕達の想定をはるかに超えた多くの人数が集まっていた。
ソフィアとマリアは言葉をなくし、マーニは集まった様々な種族を見て驚き、アカネとルルちゃんは、その人の多さにただただ驚いていた。レーヴァはこれからこの人数を面接するのかと愕然としている。
うん、僕も同じ気持ちだ。こんな大勢の中から選ぶのか……

人を雇う事がこんなに大変なんて思ってもいなかった。

3　面接

ボルトン辺境伯家の騎士に案内された先では、騎士団長のドルンさんとボルトン辺境伯が待っていた。
「随分待たせてしまったな、イルマ殿」
「いえいえ、ボルトン辺境伯様。今回はセルヴスさんにお手間をかけてしまい、申し訳ありません」
「なに、前々から聖域と繋がりを持ちたいという貴族連中や商人達が多数いて、国や儂に問い合わせが殺到しておったのだ。ならば、これは良い機会だと思ってな。一度、こういった機会を設けてやれば、彼らも諦めるだろう」
そこにセルヴスさんが姿を現す。
「そろそろ面接を始めたいと思います」
「そうか。では、イルマ殿、儂が表に出るのは差し障りがあるので、ここで失礼する。また後ほど城で会おう」

ボルトン辺境伯はそう言うと、城へ戻っていった。

◇

設置されたテーブルに、僕達とセルヴスさん、そしていつの間にか顕現していたウィンディーネ達が座る。

「……イルマ殿、こ、これはどうした事なのでしょうか？」

「は、ははは……」

セルヴスさんが、ウィンディーネ、シルフ、ドリュアス、セレネー、ニュクスの五人の大精霊達を見て、顔を引きつらせている。

僕の代わりにウィンディーネが答える。

「邪なる者を見極めるなら、私達以上の適役はいないでしょう？」

「……」

セルヴスさん、何も言えなくなってしまったな。

会場となった騎士団訓練所には、二千人近い応募者が集まっていた。

一番多いのはメイド希望の女性達。下はルルちゃんくらいの少女から、上はベテランメイド長といった雰囲気の老齢の女性までいる。身分も幅広く、いかにも貴族から差し向けられたような身なりの良い人から、貧しい暮らしから逃れるべくはるばるボルトンまで来たのであろう、襤褸を纏った少女までいた。

あまりに色々な人がいて頭が痛くなりそうだ。

「う～ん。メイドじゃなくて、聖域で保護した方がいい子もいるわね」

「そうね。そのあたりもチェックしましょう」

ウィンディーネとドリュアスはそう会話しつつ、応募者の胸に付けられた番号を控えていた。既に候補者を選別しているようだ。

ざっと見た感じ、孤児院を出たばかりの少女が、何人も応募しているみたいだな。

孤児院は、早ければ十二歳、遅くても十五歳で出なければいけない。けれど、出たところですぐに働き口を見つけられないというのが実情らしい。十二歳なんてまだまだ子供で、孤児じゃなければ親に甘えていられる年齢だと思うんだけど。

僕はソフィアに話しかける。

「孤児院にまで、今回の話が回っていたみたいだね」

「タクミ様、おそらく教会経由で情報が伝わったのだと思います」

「ああ、そうか。孤児院は創世教の教会が経営している施設がほとんどだったね」

なお、孤児院出身者であっても力仕事が出来る男の子は、仕事を見つけやすい。兵士、冒険者、職人など、ここのところの好景気に沸くバーキラ王国やロマリア王国では、むしろ引く手数多らし

い。それに比べて、女の子の就職先は厳しいとの事だった。

そうして始まった面接だけど――

「えっ！　これだけ？」

「そうね」

人数的に少ない家宰の面接からやってみたところ、ウィンディーネ達大精霊のお眼鏡に適ったのは、たった二人しかいなかった。

僕は困惑しつつ、ウィンディーネとドリュアスに尋ねる。

「……えっと、本当に二人だけ？」

「ええ。あとはどこかの貴族の紐付きか、強欲な商会から送り込まれたろくでもない目的を持った人間ばかりね」

「中には闇ギルド関連の人もいたわぁ～。もちろん、衛兵に報告したわよぉ～」

大精霊がそう言いきるなら、僕は無理やり納得するしかない。

しかし求人にも応募してくる闇ギルドって……色々と心当たりがありすぎて困る。

一人目の男性が自己紹介を始める。

「私、セバスチャンと申します。そこにおりますセルヴスとは従兄弟同士ですが、その事は斟酌せずご判断いただければと思います」

見た感じセルヴスさんと同じくらいの年齢で、従兄弟というだけあって雰囲気が似ている。

白髪をオールバックに撫でつけ、綺麗に整えた髭といい、背筋が伸びて姿勢のいい立ち姿といい、僕のイメージする執事像にハマりすぎている。

「うん、合格じゃないかしら」

「私もそう思うわ」

「……合格」

シルフ、セレネー、ニュクスが合格だと即決するけど、まだ僕達は質問も話もしていない。そもそもシルフ達は、ふるいにかけるだけで面接官じゃなかったと思うんだけど……

既に大精霊達が合格を出しているけど、僕も質問する。

「えっと、セバスチャンさんの前職を教えてもらえますか？」

「はい。とある公爵家で家宰を務めていました。この度、息子に仕事を引き継ぎ隠居いたす所存でありましたが、あるスジから今回のお話を紹介していただきました。それで隠居を撤回いたしまして応募したという次第でございます」

「こ、公爵家……」

セルヴスさんの従兄弟なら優秀なのだろう。現に長年にわたり、公爵家の家宰を務めていたという。

その後尋ねたところ、僕のところに雇われたとしても、僕の情報を公爵家に漏らす事はないと

言った。ちなみに逆も然りで、公爵家の事はほとんど教えてもらえなかった。
うん、このあたりは信用出来そうだ。
セルヴスさんが申し訳なさそうに話す。
「イルマ殿。大精霊様方のお眼鏡に適うのが二人だけとなり、しかもどちらも私の身内という、少々予想外の事態になってしまいました。私が言うのもなんですが、セバスチャンは有能なのはもちろん、人間的にも信頼出来る男でございます」
セバスチャンさんがセルヴスさんの身内なのはさておき――
「えっ！　もう一人の若い方もセルヴスさんの身内なんですか！」
「はい。私の孫、ジーヴルでございます」
そう言って、更に恐縮するセルヴスさん。
そのジーヴルさんが自己紹介してくる。
「ジーヴルと申します。イルマ様のお話は、お爺様よりよく聞いています。未熟ですが、一通り執事の仕事は身につけているつもりです」
「……」
セバスチャンさんの横で、姿勢良く立つ二十代半ばの若者を見つつ、僕は頭を抱える。
絞り込むのを大精霊達に任せたけれど、これで良かったのか？

◇

ウィンディーネ達が太鼓判を押した、セバスチャンさんとジーヴルさん。この二人は見るからに有能そうなので、決定でいいと思う。
ソフィアやマリア達も異論はないようだし。
そして現在、ウィンディーネやドリュアスが凄い人数の女の人達を選別している。とはいえ、その選別を受けている女の人達は困惑気味だ。
何故なら質問一つなされずに、合格、不合格が決められているから。
僕は心配になってきて、ソフィアに声をかける。
「大量にはねられてるけど、それでも多くないかな」
「ボルトンと聖域、両方の屋敷で雇ったとしても多いと思いますね」
大精霊達の選別に合格した人達を、このあと僕達が面接する予定なんだけど……人数の多さもさる事ながら、ちょっと選びづらいな。
というのも――
「何だか痩せ細った女の子ばかりだね」
「ええ。孤児院出身の女の子じゃないでしょうか？」
マリアの言う通り、選別にパスしているのは、このまま放っておいたら夜の街へ売られていく未

来しか想像出来ないような孤児達だった。
僕はマリアに告げる。
「大精霊は人とは違って、善性の存在だからね。救える子達が善良であるなら、助けたくなるんだと思うよ」
人はどんな善良な人でも、１００パーセント善なんてありえない。対して大精霊達は１００パーセント善でしかなく、悪の部分は１パーセントもない。
大精霊は何だかんだいって善い奴なのだ。
その時僕は、大精霊達の選別をくぐり抜けた中に、周りから浮いている女性を見つけた。
「あれ？　随分とお歳を召した方がいるな」
「タクミ様、たぶんメイド長候補だと思いますよ」
「ああ、なるほどね。そういえばミーミル王女の侍女の中にもいたね」
マリアの答えに納得する。
ウィンディーネ達は、メイド達を教育する人材としてあの女性を選んだのかな。確かに背筋がピンと伸びていて、立ち姿が凛としてカッコイイな。

しばらくして一通り選別が済んだようだ。
メイド候補の中には、ボルトン辺境伯、ロックフォード伯爵、バーキラ王国宰相のサイモン様から送り込まれた人もいたらしい。そうした人達は、他の多くの貴族達から送り込まれた人達と違い、大精霊達の選別をパスしているとの事。
最終的に残ったメイド候補は、三十人だった。
なお、その人数に保護する子達は入っていない。そうした子達には、聖域で暮らさせながら出来る仕事を探させるんだって。
ウィンディーネが話しかけてくる。
「タクミ、終わったわ。あとは仕事場をボルトンと聖域とに分けるだけね」
「あの、面接は？」
「もう聞くべき話は聞いてあるわよ。どこの出身で何が出来るのか程度だけどね。でも、仕事は何も出来なくても問題ないでしょう？」
「……まあ、構わないけど」
そうして「なら、もう全員合格ね」と勝手に決めてしまったウィンディーネに、僕のいる意味は？　と問い詰めたくなる。
僕は大きく肩を落とし、マリアに話しかける。
「はぁ……せめてベテランの方と即戦力の方とは、少しお話しさせてもらおうか。残りの子達はまずお風呂とご飯だね」
「じゃあ、先に私とマーニでボルトンの屋敷に連れていって、お風呂に入れてご飯を食べさせてお

きますね」
マリアが立ち上がりながらそう言い、マーニも頷く。
「ありがとう。ついでに、下着や着替えの服と日用品の買いだしもお願いね」
僕はマリアにお金を渡して、少女達の世話を頼んだ。それから、横で満足げにしているウィンディーネの方を見る。
「これでいいんだろ？」
「わかってるじゃない」
どうやったかわからないけど、ウィンディーネはボルトン辺境伯とセルヴスさんに、働き口を見つけられなかった孤児を集めさせていたらしい。それを聞いて唖然としていると、ウィンディーネから「手の届く範囲で助けてあげてほしい」と真面目な顔で言われた。
「タクミの手なら遠くまで届くでしょ。さあ、面接の続きをしましょう」
「はぁ、わかったよ」
何かハメられた感はあるけど、僕としても異論はない。実際、聖域でならいくらでも仕事はあるからね。

僕は、残ってもらった女の人達を見る。
メイド長候補の女性が一人と、二十代半ばから十代後半の四人の女性、合わせて五人の女性が

残っていた。即戦力のメイド候補だ。
採用は決まったようなものだけど、一応年配の女性から面接を始めようかな。人となりを見ておきたいからね。
「メリーベルと申します。バーキラ王国ボルトン辺境伯領の生まれでございます。前職はとある辺境伯家でメイド長を務めていました」
上品そうに話すメリーベルさんだけど、「とある辺境伯家」って、ボルトン辺境伯家以外考えられないんだけど。
セルヴスさんを見ると、彼は複雑そうな表情をしていた。
「メリーベルは、確かにボルトン辺境伯家のメイド長でございました。それがこの話が動きだすやいなや、ゴドウィン様に暇乞いをいたしまして……」
「えっと、良かったんですか？」
「もちろんでございます。新しく刺激的な仕事に胸躍る気分でございます」
ニコニコとそう言うメリーベルさん。
どうやらそろそろ引退するつもりだったようだけど、僕が聖域とボルトンの屋敷のメイドを募集すると聞き、新人の教育をしながら聖域で暮らすのも悪くないと思ったそうだ。メリーベルさんは思いついたら即行動するタイプで、その日のうちに暇乞いをしたらしい。
「す、凄い行動力ですね」

「お褒めにあずかり光栄でございます、旦那様」
見事な角度で頭を下げるメリーベルさん。
ソフィアとマリアもメリーベルさんの独特の空気に呑まれていたけど、ともかくうちのメイド長は彼女で決まったようだな。
続いて、残りの四人の面接……というか自己紹介に移る。
「それでは私から自己紹介させていただきます。マーベルと申します。メリーベルは私の祖母でございます。メイドの仕事は祖母に仕込まれていますのでお任せください」
そう自己紹介したマーベルさんは、二十代半ばのライトブラウンの髪にクールな雰囲気で、いかにも仕事が出来そうな女性だった。四人の中で年齢が一番上らしく、既にリーダー的ポジションになっている。
次に自己紹介したのは、サーラさんという二十歳の女性。この世界には珍しい黒髪だけど、顔立ちは西洋人風で、大人しそうな美人さんだ。
その次がアンナさん。十八歳でセミロングの金髪を後ろでまとめた、元気そうな明るい印象を受ける少女。
最後の子がティファさん。十六歳で綺麗な青い髪の少女。青い髪の色っていかにも異世界だと思った。柔らかな雰囲気の子で、優しげな大きな垂れ目が印象的だ。
「先ほどの少女達の教育も、お祖母様と私達にお任せください」

マーベルさんがそう言って頭を下げると、練習したかのように、サーラさん、アンナさん、ティファさんも頭を下げた。
みんな角度までぴったり一緒だった。
「あ、ああ、頼むよ」
思わずそう言ってしまったけど、これって面接だったよね。名前と年齢しか聞いていない気がする。始まるまで緊張していた僕は何だったんだろ。
なお、このマーベルさんをはじめとする四人のメイドはそれぞれ、ボルトン辺境伯家、ロックフォード伯爵家、バーキラ王国の宰相サイモン様、そしてなんとロマリアの宰相ドレッド様からの紹介だった。
それでも、僕の情報は絶対に紹介元に漏らさないとの事。まあ、サイモン様やドレッド様もそういう目的で、彼女達を送り込んだんじゃないんだろうし。
ウィンディーネとシルフが言う。
「じゃあ、私達は聖域に戻るわね」
「あまり長く聖域以外で私達が顕現していると、どんな影響があるかわからないものね」
「ちょっ、大丈夫なのか？」
シルフの問題発言に僕が慌てていると、ドリュアスが言う。
「大丈夫よ、タクミちゃん。じゃあ、お姉ちゃんは行くわ」

続いて、セレネー、ニュクス。
「うん、面白かったわ」
「……バイバイ」
ドリュアス、セレネー、ニュクスが僕に手を振ったと思ったら次の瞬間、彼女達はその場から消えていた。

その後、僕はセルヴスさんにお願いして、今回不合格となった人達に、銀貨を五十枚ずつ配ってもらう事にした。欲深い貴族や商人から遣わされたとしても、わざわざボルトンまで長旅してきた人もいる。流石に手ぶらで帰すのは忍びないからね。
銀貨五十枚は日本円にすれば、五万円程度。少なくもないけど大した額じゃない。これは僕の自己満足だ。
セルヴスさんは、彼女達はそれぞれの貴族家からお金をもらっているので、そこまでする必要はないと言ったけどね。
まあ、僕のところで不採用でも、ボルトンもウェッジフォートも人手不足なので、仕事は色々とあると思う。
さて、やるべき事はたくさんあるぞ。うちで新しく働く事になる人達のために、服とかも作らないとな。僕がそう考えていると、僕の思考を読み取ったかのように、アカネが言ってくる。

「メイド服ね……当然、揃えるべきね」
「ルルと同じですニャ」
「スカートはロングにするわ」
早速、メイド服に決定してしまった。
うちではルルちゃんが、秋葉原のメイド喫茶で出てきそうなメイド服を着ていたりする。これは当然アカネの仕業。マリアが着ている服も、メイド服に見えなくはないけど。
「ふふふっ、色々とデザインしないと。カラーバリエーションも必要ね……」
アカネが自分の世界に入ってしまい、ブツブツと呟いている。

それから僕は、晴れて僕の屋敷の家宰になったセバスチャンとジーヴル、それとメイド長を任せるメリーベルを呼び、ボルトンの屋敷へ移動すると告げた。
最後にセルヴスさんに、騎士団の訓練所を貸してもらったお礼をもう一度言い、後日改めてお礼に伺うと言って、その場をあとにする。

◇

マリアとマーニは、雇い入れた少女達を、ボルトン辺境伯家から借りた馬車に乗せていったよう

だけど、僕の方はいつもの装甲馬車を使う事にした。
最初に見せておくと、面倒がなくていいと思ったんだ。
……でもそれは早計だったかもしれない。
僕がアイテムボックスから馬車を取りだすと、皆口を開けて呆然としてしまった。メリーベルの表情は面白かったけど、そんな事言うとあとで怒られそうだな。
更に亜空間から巨大な体躯をした、グレートドラゴンホースのツバキが現れると、マーベル達は悲鳴を上げた。
セバスチャンもジーヴルも腰を抜かしていて手伝えそうにないので、僕とレーヴァで手早く馬車にツバキを繋ぎ、みんなを馬車に乗るように促す。
「……わっ、わ、私が馭者を務めさせていただきます」
復活したジーヴルが慌ててそう言うけど、それは必要ない。
「うん。今後はジーヴルに馭者をしてもらう事もあるかもしれないけど、今日はいいから馬車の中でゆっくりしてて」
「「ひっ！」」
「紹介しておくね。彼女がアラクネのカエデ。僕達の家族だから」
僕が、ツバキの背にいつの間にか乗っているカエデを指差して言うと、ジーヴルとセバスチャンは言葉を失っていた。

「「……」」
ボルトンの街でカエデは有名だから怖がる人はいないけど、王都で暮らしていたセバスチャンとジーヴルには刺激的だったみたいだ。
何とかセバスチャン達を馬車の中に押し込み、僕達はボルトンの屋敷に向けて走りだした。

4　人が増えると大変です

馬車で移動しつつ僕は思案する。
新しく僕のもとで働く事になった人達に、どこまで秘密を知ってもらおうか。転移ゲートや天空島などは教えない方が良さそうだけど……いや、もう隠す必要はないか。僕が聖域の管理者だという事も知られているしね。
やはり、転移ゲートだけは近いうちに話してしまおう。聖域まで移動するのに、毎回馬車なんて面倒だもの。
屋敷に到着し、ツバキを亜空間に、馬車をアイテムボックスに収納した僕は、セバスチャン達を屋敷の中へ誘う。だが、ボルトンの屋敷は警備用ゴーレムが常時警戒しているので、登録された人

間以外は通れない。
僕はみんなに告げる。
「全員の魔力パターンを登録するので、順番に一人ずつ進んでください」
「こ、これが警備用ゴーレムでございますか……」
「……」
セバスチャンが、身長2メートル50センチの魔鋼製ゴーレムを見て身を固くする。メリーベルも絶句していた。まあそれも仕方ないと思う。どんな貴族や豪商でも、屋敷の警備にゴーレムは使わないだろうからね。
僕は固まる一同の登録を強引に済ました。
「よし。これでみんな、ゴーレムに止められたり攻撃されたりしなくなりました。じゃあ、中に入ってください」
屋敷に入ると、入り口すぐの場所で、マリアとマーニが連れ帰った少女達が身綺麗になって並んでいた。服は帰る途中で買ったようだ。お風呂に入ったおかげで肌のくすみが取れ、ゴワゴワだった髪の毛も整えられている。改めて見てみると、人族、ドワーフ族、獣人族と様々な種族の子がいた。年齢は上は十五歳くらい、下は十歳くらいに見える子もいる。
あまりにも若いので僕が首を傾げていると、マリアが説明してくれる。
「予算の厳しい孤児院では、年齢に関係なく働けるようになったら、強引に追いだしてしまう場合もあるらしいですね」
「……そうなんだ」
「「「「……」」」」
僕達を見て、少女達は身体を強張らせていた。僕は、そんな少女達をリラックスさせるように優しく話す。
「みんなには、屋敷の管理のお手伝いをしてもらう事になります。それで、家宰の役目をしてもらうのが、こちらのセバスチャン。奥にいるジーヴルには、ひとまず補佐として働いてもらいます。メリーベルには、マーベル、サーラ、アンナ、ティファと一緒に、この子達の教育をお願いします」
僕がセバスチャンとメリーベルの方を見ると、二人はその視線の意味を理解したみたいで、女の子達に向かって自己紹介する。
「家宰のセバスチャンでございます。旦那様のスケジュール管理、貴族や商会との交渉など外向きの仕事が主になります。以後、お見知りおきを」
「メリーベルと申します。私はメイドの仕事と、屋敷の管理、旦那様や奥様方のお世話など、内向きの仕事の責任者となります。あなた達の直接の上司という事になりますね。ともにイルマ家のために頑張りましょう」
すると、少女達は声を揃えて応える。

「「「「よろしくお願いします！」」」」
少女達の中には幼い年少の子達もいる。今日だけで色んな事があり疲れてしまったようで、眠気を必死で我慢していた。
僕はマリアに声をかける。
「今日はもう部屋で休んでもらおうか」
「わかりました。みんな私について来て」
「「「「はい！」」」」
新しく人を雇うと決めてから、使用人用に建物を建てておいた。想定よりもだいぶ人数が多いけど、部屋とベッドには余裕があるかな。
マリアとマーニは、少女達を使用人用の建物へ連れていった。

その後、セバスチャンとメリーベル達メイドを交えて、みんなで話し合う。
ひとまずリビングに全員座ってもらい、改めて僕達の事を詳しく紹介する。うちには他では絶対見られない、カエデやタイタンといった仲間がいるからね。それを終えると、今後の予定を話しておく事にした。
「セバスチャンにはさっき話した通り、この屋敷で外との窓口として働いてもらいたい。ジーヴルはセバスチャンの補佐をお願い」

「「わかりました。精いっぱい務めます」」
なお、セバスチャンには更に重要な役目があって、シドニアでの教会建設のために、創世教やバーキラ王国、ロマリア王国の担当者と細かな話を詰めてもらいたい。
メリーベルやマーベル達にもさっき言ったけど、メイドとしての仕事の他に、少女達の教育により力を注いでもらおうと思う。
あとは、料理人の雇用や庭職人の雇用なんかも任せてしまおうと思っている。
みんな、僕が選ぶよりも確かだと思うしね。

◆

長く執事の仕事一筋に生きてきた私、セバスチャンが隠居を考え始めた時。セルヴスから、ある家の家宰をしてみないか、と誘われました。
どんな家なのか聞いてみると、貴族ではなく平民の家だと言うではありませんか。
しかもセルヴスは、自分の孫のジーヴルも誘ったのだとか。
少々気になったので、長年培った人脈を活かして情報を収集してみたところ、驚きの連続でした。
近年、王国内で普及し、街の衛生環境を激変させた浄化の魔導具と、その機能が付いた便器を開発した方だったとは……

立ち読みサンプル
はここまで

どうやら、そんな有名人であるイルマ・タクミ殿の、対外的な事全般を差配するお役目だそうです。
早速、募集に応募してみました。

面接当日、ボルトン辺境伯領の領都ボルトンの城にある騎士団の訓練所に行くと、たくさんの人が集まっておりました。その数二千人ほど。
応募者の顔ぶれを見て、イルマ殿がただ者ではない事が改めてわかりました。
というのも、八割以上が貴族の紐付き。しかも、ろくでもない貴族から送り込まれたのは明白でございます。イルマ殿に取り入ろうという魂胆でございましょう。
まあそれを言えば、私も送り込まれたようなものですが。セルヴスとは別に、宰相閣下と陛下からもお声かけいただいたので。
それはさておき、その後しばらくして家宰候補の面接が始まりました。
驚きました。長く生きてきて、常に冷静でいる自信がありましたが、その私が声を失いました。
面接官の座るテーブルに、大精霊様達が顕現されて並んでいるのです。
そんな私の驚愕をよそに、家宰の面接はあっという間に終わりました。
残ったのはたった二人、私とジーヴルだけ。
その後すぐに行われたメイドの面接も、それほど時間をかけずに終了。あれだけの人数がたった